

書評

竹内真人編著『ブリティッシュ・ワールド—帝国紐帯の諸相—』（日本経済評論社、2019年、viii＋330頁）

左近 幸村

本書はそのタイトル通り、ブリティッシュ・ワールド論をテーマに、総論を除くと10本の論文（うち2本は翻訳）が集められている。個々の論文は実証的で非常に水準が高いという印象を受けた。だが最初に断っておけば、評者の専門はイギリス史ではなくロシア史である。したがってイギリス史やイギリス帝国史の研究の潮流について、正確に把握しているわけではない。本書所収の各論文からは多くのことを学ぶことができたが、門外漢の立場から勉強になった部分を列挙しても、下手な感想文にしかならないだろう。

評者には、近年のイギリス帝国史は、グローバルヒストリー研究や、コモンウェルス研究によって活況を呈しているように見える。前者はアジア経済史と関連付けることで、現代的意義を打ち出そうと試み、後者はコモンウェルスという国際組織に着目することで、「衰退期」と思われる20世紀においても、イギリス帝国が国際関係上無視できない存在であったことを、示そうとしている。それでは、ブリティッシュ・ワールド論は何を論じようとしているのか。この書評では、その点に的を絞って論評してみたい。したがって、各章への言及の仕方が偏ってしまうことも、あらかじめお断りしておく。なお、2019年9月21日に明治大学で開かれたイギリス帝国史研究会主催の本書の書評会に評者も出席し、細川道久、前川一郎、山口育人の各評者、並びにフロアからのコメント、それに対する各執筆者からのリプライも参考にしている。

評者から見て、ブリティッシュ・ワールド論の最も簡潔な説明は、サイモン・ポッターによる第8章「第二次大戦戦時中にブリティッシュなるものを放送する—ラジオとブリティッシュ・ワールド」の冒頭にある。それによれば、ブリティッシュ・ワールドとは、カナダなどのドミニオンに加え、「白人と非白人を問わず、その構成員が自らをブリティッシュとして認識しているような共同体を含むものでもある」。その統合を可能にしている紐帯として、政治、経済、人口学、軍事等々が挙げられるが、なかでも重要なのは「イギリス共同体という感情的な観念」である。数えたわけではないが、確かに「感情的紐帯」という言葉が多く章で使われている。

次に、全体の構成を見てみよう。前述のように、本書は全10章から成るが、私見では、扱っている内容から以下のように分類することが可能である。

- 本国から帝国全体を俯瞰したもの：第3章、第4章、第7章、第8章。

- アイルランドを対象としたもの：第1章。
- カナダを対象としたもの：第5章、第6章。
- インドを対象としたもの：第2章、第9章、第10章。

大きな問題設定に基づく論文集を作る場合、人選に苦勞することが多いが、本国、ドミニオンのカナダ、植民地のインド、位置づけが特殊なアイルランドと、イギリス帝国全体を俯瞰するには、ひとまずバランスが取れていると言えるのではないだろうか。編者の竹内真人による総論「ブリティッシュ・ワールド論の射程」での整理では、一口にブリティッシュ・ワールド論と言っても、その出発点となった本国とドミニオン諸国の紐帯に焦点を当てるもの（狭義）、そこにアメリカ合衆国の加えるもの（広義）、アメリカを外すかわりに、インドなどの帝国の属領や中国のような非公式帝国との紐帯も視野に収めるもの（最広義）の3つに分かれる。インドが入っている以上、本全体としては最広義になるが、ブリティッシュ・ワールド論としての面白さを実感したのは、狭義に当たるカナダと本国の関係を対象にした、松永友有の第5章「帝国特惠関税同盟構想の理想と現実—ジョゼフ・チェンバレンのヴィジョンの挫折」と、福士純の第6章「カナダ自由党と自由主義的帝国主義論」である。

この2つの章は対となり、イギリスとカナダの政治家が、両者の感情的紐帯を利用して、帝国関税同盟の構想から自国と自党に有利な条件をひき出そうとする駆け引きを、それぞれイギリスとカナダの側から描き出しており、スリリングである。アンドリュー・ディリーの第4章「ジェントルマン資本主義論が言わずにすませ、見ずにすませていること—ブリティッシュ・ワールド論との関連で」は、金融を中心にイギリス帝国を論じるジェントルマン資本主義論と、文化やアイデンティティの役割を論じるブリティッシュ・ワールド論は、お互いの盲点を批判するだけでなく、相互に補完しあう必要性を指摘しているが、第5章と第6章はまさしく、感情的紐帯と経済史を架橋した良い例だろう。

しかしこうした架橋が可能なのは、後にも触れるように、カナダがドミニオンとして「イギリス共同体という感情的な観念」を強く有しているからではないか、という疑念も生じる。戦後の英印関係を鋭く分析した渡辺昭一の第9章「アトリー政権期のコモンウェルス防衛と南アジア」と横井勝彦の第10章「独立後インドの『軍事的自立化』とイギリスの位置」から、カナダのような強い感情的紐帯を読み取ることは難しい。竹内真人の第2章「インドにおけるイギリス自由主義的帝国主義」では、イギリスに感情的紐帯を抱くコラボレーターが、イギリス側が意図したほど増えなかったにしても、独立期に至るまで長期にインドに存在したことが指摘されている。だがそうしたインドのコラボレーターが抱く感情的紐帯と、カナダの多くの有権者が抱いていたと思われる感情的紐帯を、同列に

論じられるのかは、定かではない。本書では、本国とドミニオンや植民地とのバイラテラルな関係には光が当てられるが、多角的な関係や比較はあまり論じられていない。簡単にできることではないが、各「紐帯」の内実を明らかにするためには、ドミニオンや植民地間の比較の視座が求められるのではないだろうか。

ブリティッシュ・ワールド論は「イギリス共同体という感情的な観念」を重視するが、注意したいのは、その文化的核が「本国」にあるとは限らないはずだ、ということである。第一に、ブリティッシュ・ワールドにおける「本国」とはどこのことなのだろうか。しばしば指摘されるように、「イギリス」という日本語が指す範囲は曖昧である。そのことを端的に示すのが、本書のviii頁に載っている凡例であり、*Britain, Great Britain, United Kingdom, England*等々の英語をどのように訳したのか、細かく紹介されている。論集を作る際、このようにいくつもの訳語の統一を図らなければならないことが、「イギリス」ならびに「イギリス帝国」の複雑さを物語っている。「本国」の複合性については、勝田俊輔の第1章「ブリテン・アイルランド間の民兵交換—ブリティッシュ・ワールド『本国』における紐帯」である程度論じられているものの、他の章には見られない。

第二に、「紐帯」が「本国」から先に失われた例もあるということ、を、想起しておきたい。第一次世界大戦の戦没者追悼式典が、現在に至るまでどのように変化してきたのかをイギリス、カナダ、オーストラリアの間で比較した津田博司によれば、追悼式典は、早くも第二次世界大戦直後に、まずイギリスにおいて帝國的文脈を喪失し、一国的なものへと変化していった。逆に、カナダ、オーストラリアといったドミニオンは、帝国の支配からの脱却ではなく、帝国の一員という意識を抱えつつ、ナショナル・アイデンティティを形成していくことになる。すなわち、ブリティッシュ・ワールド論の言葉を使えば、帝国の「紐帯」こそがドミニオン両国のナショナリズムを生むという逆説が見られたのである。そういった意味でも、ブリティッシュ・ワールド論は、ドミニオン研究には有効だろう。

ナショナリズムとの関連では、石橋悠人の第3章「時計時間の移植と管理—イギリス帝国の植民地天文台と時報技術」が注目に値する。よく知られているように、ベネディクト・アンダーソンは、「均質で空虚な時間」がナショナリズムを生み出す大きな原動力となったと論じた²⁾。時計がそのことと不可分であることは、石橋も十分意識している。だがナショナリズムが特殊なのは、それが命を捨てさせるほど強い「紐帯」を築くところにある。

1) 津田博司『戦争の記憶とイギリス帝国—オーストラリア、カナダにおける植民地ナショナリズム』刀水書房、2012年。評者は同書についての書評を、『境界研究』3号、2012年、155 - 159頁に寄稿している。

2) アンダーソンの言う「均質で空虚な時間」については、次の文献も参照。磯前順一「宗教を語りなおすために一言説とネーション」『みすず』542号（2006年9月号）、8-20頁。

必ずしも「本国」の思惑通りに進んだわけではないようだが、時間の管理により、イギリス帝国は植民地の人々にとっても、命を捧げる対象となったのだろうか。石橋の論文は科学史としても十分面白いが、より広くナショナリズムと帝国の関係についても、考える手がかりを与えてくれる。

「本国」のアイデンティティについては、馬路智仁の第7章「コモンウェルスという神話—殖民・植民地主義、大ブリテン構想、ラウンド・テーブル運動をめぐる系譜学」における、19世紀から現在のEU離脱に至るまで、イギリスにおいて「感情的紐帯」がことあるごとに「亡霊」のようによみがえるという指摘も、重要だろう。いわば、「本国」において、「紐帯」は単純に減衰していったわけでもなければ、一貫して強く持続しているわけでもない。その浮沈にこそ注目する必要があることを、教えてくれる。

以上、ブリティッシュ・ワールド論の意義という観点から、論じてみた。辛口の印象を持たれたかもしれないが、最初にも述べたように各々の章は読みごたえがあり、その意味では十分推奨に値する本である。ところがそれ故に、章ごとに込み入って論評するとすぐに字数を超過するので、本全体のテーマに的を絞ることにした。的外れな論評に終始したのではないかと、戦々恐々としているが、ご寛恕願う次第である。

（新潟大学経済学部准教授）